

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスベース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

東日本大震災の発災から早9年9カ月が過ぎました。ニュースレターの第1号を発行したのが、2011年4月30日でした。そして本号で144号。この号では、仙台教区サポートセンター事務局長の小野寺洋一神父が、新型コロナウイルス禍のなかで、自粛せざるを得なかったものは、カリタスが大切に育んできた活動そのものであった、と吐露しています。また、札幌カリタスの活動を引き継いで、「カリタスみやこ」として、歩んでいる宮古教会の活動の紹介。さらに、仙台教区の各小教区、修道会、活動支援団体へのアンケートのまとめをご紹介します。「10年を振り返って」という項目に、自由に、心を込めてお書きになってくださったことが、心をうちました。本当にありがとうございました。震災から丸10年となる来年の3月に向けて、仙台教区サポートセンターでは記念誌を作成しており、その中でもたくさんの方の「10年を振り返って」の声を掲載予定です。どうぞそちらもご期待ください。

クリスマスおめでとうございます

仙台教区サポートセンター 事務局長 小野寺洋一神父

皆様、クリスマスおめでとうございます。今年はコロナ禍のために、大勢で集まってクリスマスをお祝いすることが難しくなってしまいました。去年の今頃には予想もしなかった事態です。まさに今、感染症と闘っておられる患者の方、感染への恐怖の中で、命を守るために働いておられる医療従事者をはじめ、エッセンシャルワーカーの方々のために祈ります。

新型コロナウイルスの感染拡大により、東日本大震災の被災地で展開されてきた支援活動も、今年は大きな制約を受けざるを得ませんでした。顔と顔を合わせて話すこと、ともに食卓を囲むことは、感染症対策のために「自粛」が求められますが、それはこの9年数か月の間に、各地で大事に紡がれてきた「カリタスさん」の活動そのものでした。

批評家、随想家の若松英輔さんはコロナ禍にあって出版した『弱さのちから』という本の中で、「さわる」と「ふれる」というよく似た言葉を挙げて、このように書いています。「今、私たちは、大切な人の手に『さわる』ことができない。しかし、だからといって相手の心に、あるいは魂に『ふれよう』とすることまであきらめてしまったら、この世界は根底から崩れ去るだろう。『さわる』ことを基軸とした世界から、『ふれあう』世界へと移行していかなければならない。」そして「近くにいる人たちと『さわる』『まじわる』『むれる』のではなく、離れた場所にいる人と人との『ふれる』『つながる』『つどう』を実現する。このときに頼みになるのは、言葉だ。」

コロナ禍に阻まれて、これまでの活動が難しくなっても、「カリタスさんたち」は、限られた時間の出会いで、あるいは電話で、あるいは手紙で、言葉を掛け合い、「つながる」ことをあきらめようとしません。それは、これまでの歩みの中で、人と人とのつながりが、弱った心を励まし、希望を持つ力となることを知っているからです。

本格的な冬を迎え、コロナ禍の収束のきざしはいまだに見えないままですが、私たち一人一人が希望を失わず、離れた場所にいる誰かを思いながら、クリスマスを迎えることができたと思います。

新しい年も、皆様の上に、神様の豊かな祝福が注がれますように。

カリタスみやこの活動

カトリック宮古教会 伊藤純子

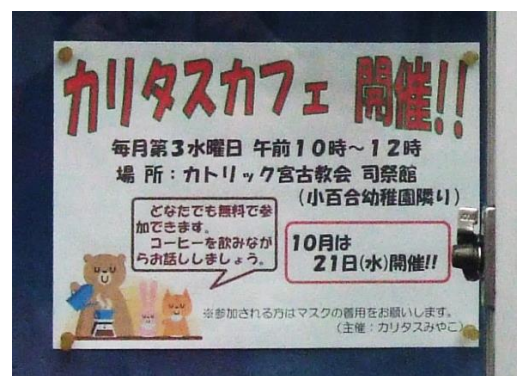
カリタスみやこの活動は、札幌カリタス宮古ベースが始めた活動を引き継いだものです。震災直後から8年間続けてきた活動は主にカフェ活動で、被災者に寄り添い(傾聴)、安らぎと憩いを提供、時に手芸や、さおり織りの講習から事業展開までの援助などの支援を続けていました。震災被災者だけにとどまらず、台風被災の岩泉町にも出向き、被災者として同じような状況下の方々に寄り添い、支援してきました。

札幌カリタスは2018年3月でベースを引き上げ、活動の継続を宮古教会がカリタスみやこという名で引き継いで行くことになりました。

岩泉町での活動は仮設住宅完全撤去で2019年12月までで終了となりました。震災被災地山田町でも、仮設撤去が進む中、仮設集会所使用が3月まで！ということで活動の終了を告げられました。最後の活動日の3月に、山田町の方々と『さよなら(感謝)会』を計画していましたが、この新型コロナウイルス感染症のために全て中止になりました。よく、被災者との「絆」ができた！という話を聞き

ますが、私たちの活動ではそこまではいきませんでした。活動の目的は、寄り添うこと、憩いの場の提供、必要な支援だけ、ですので、個人情報を得ることなく活動してきました。しかし、最後のさよなら会も出来ず、連絡も取れず、皆さんとそのまま会うこともできていないのが残念です。

宮古教会での3月から休んでいた《教会カフェ》は7月から感染防止対策をしながら、時間を短縮して以前のように再開しました。再開周知の連絡にも、利用者の名簿も情報もない状況下で何とか2人と連絡が取れ、8名が参加してくれました。「久しぶりに一緒に話げできた！」と喜んでいました。皆さんの笑顔を見て話が聞けたことは、やはりとても良かったと感じました。新型コロナウイルス禍の中で細々とでも、みなさんの要望を入れながらこの活動は続けていく予定です。





コロナウイルス感染症が終息しない状況下、感染防止策と言われている ①マスクの着用、②手指などの消毒、③三密を避け換気の徹底、④大声を出さない、だけで大丈夫だろうか？の疑問、感染者らしき人だけの検査だけで感染が防げるの？という疑問だらけの中、恐怖と不安で委縮して何も行動しない？できないでいる？ことが多いのではないのでしょうか。もし感染者が出た場合の対処の仕方などを相談しながら、できる事を検討していこうと思っています。（世界中のわたしたち、みんなは地球に住む一つの家族の一員です。みんなが助け合って、寄り添って、心をつなげて、このコロナウイルスが終息しますように！祈り続けましょう。心の平安と普段通りの生活が戻りますように！）



カフェのある日には、こんなかわいいのぼりが立ちます

東日本大震災復興支援活動に関するアンケート

東日本大震災から、9年9か月が経ちました。これまで行われてきたさまざまな支援活動の現況をおたずねするアンケートを、仙台教区内の小教区、修道院、福島支援にあたっている活動グループを対象に10月に実施し、27件の回答をいただきました。コロナ禍にあり教会活動がままならない中、ご協力をいただきました皆様へ、この場を借りて御礼申し上げます。

①2020年10月現在、教会として東日本大震災で被災された方々への支援活動を行っていますか？

- ・活動している 10件
- ・以前していたが、現在はしていない 12件
- ・活動していない 5件

「以前していたが、現在はしていない」という回答の中には、「コロナ禍のためやむを得ず休止している」と書き添えてくださったところが多くありました。

②「活動している」とお答えの場合、具体的にどのような活動をしていますか。

- ・復興住宅、災害公営住宅、教会でのお茶会、傾聴活動
- ・サロンでのパッチワーク支援活動
- ・戸別訪問
- ・季節のイベント
- ・物資提供

- ・献金
- ・祈り
- ・カリタスベースでのボランティア参加
- ・カリタスベースへスタッフとして会員を派遣
- ・自主避難者(区域外避難者)との集い(現在は集まることができないので、電話をかけている)
- ・福島やさい畑の販売協力
- ・被災地に居住し、地域の方々とともに暮らす
- ・おたよりを発行し、送付
- ・ニュースレター、新聞等で現状を知る



③「以前していたが、現在はしていない」とお答えの場合、いつからいつまで、どのような活動をしていましたか。

- ・聴覚障がい者との手話でのおしゃべり会や食事会、戸別訪問(2011年5月～2017年)
- ・修道院別棟をボランティアの休息、宿泊施設として提供(2011年)
- ・仮設住宅での歌声活動(2011年3月～2013年12月)
- ・温泉ツアー(2011年3月～2013年12月)
- ・仙台市内の斎場で身寄りのない方のためにお祈り(2011年4月～5月)
- ・「白河みみずく」として、双葉、浪江、白河などの被災者が暮らす仮設住宅での傾聴、イベント(2011年8月～2018年4月)
- ・仮設住宅への訪問、傾聴
- ・物資提供
- ・シスターズリレーに参加(2011年)
- ・現地見学
- ・献金
- ・ベースのボランティア参加
- ・泥出し、がれき撤去など(2011年)

④現在、教会としてではなく、教会内の有志のグループや個人で支援活動をしていらっしゃる方はいますか。

- ・いる 4件
- ・いない 12件
- ・よくわからない 5件
- ・無回答 6件

⑤④で「いる」とお答えの場合、どのような活動をしていらっしゃいますか。

- ・有機農業者の支援
- ・アロマ・ハンドトリートメント提供
- ・情報発信
- ・現地案内
- ・福島の農家支援
- ・被災者支援(イベント、食料配布)
- ・復興住宅でのお話、編み物
- ・独居の方、日中一人になるお年寄りや施設入所者への傾聴

⑥間もなく東日本大震災、福島第一原発事故から丸10年となります。この10年を振り返って、今、どのようなことを思っていますか。

◆青森県

・私事ですが、第二次世界大戦を体験したものとして、10年の過去、何十年の過去と変わりのないものだと思います。さまざまな思いと状況に、今なお苦しんでおられる方々とともに、この節目を新たに神の光と愛のもと歩みを続けてまいりたいと心を一つにいたしております。

・震災から10年が経ち現在は支援をしていませんが、テレビ等で今もまだ震災の悲しみが癒えない人があるのを見ると心が痛みます。苦しみ、悲しみを抱えながらも一生懸命頑張っている人には心からのエールを送ります。これからも被災された方々のために祈りを続けたいと思います。

・2011年3月11日東日本大震災と福島第一原発事故から丸10年を迎えようとしています。被災された方々は一瞬のうちにすべてを失い、苦境に立たされ、苦悩、不安、悲しみの中で現実と向き合い必死に生きてこられたのです。日本司教団、平賀司教様、仙台教区司祭、信徒の方々、全国からの支援、復興活動、ボランティアの方々の活動、被災された方々に「寄り添いともに」を心とし、「神様はともにいてくださる」を体現され、神様に信頼し、一丸となり、支援、復興活動にご尽力されていることを深く感謝しております。ニュースレター、カトリック新聞等を読み、皆様の働き、ともに寄り添っていらっしゃる姿を心に留めております。支援・復興活動これから先も継続されていきますが、コロナ禍の中で活動中止等困難な状況が心配です。皆様と心を合わせ、祈り、可能な支援をさせていただきたいと思います。



◆岩手県

・生徒たちと体育館で卒業式練習をしていた時、急に天井の蛍光灯が大きく揺れ生徒たちを上靴のままアイスバーンの庭に導き…学校の屋根瓦やテレビが転がり落ちるのを目の当たりにして、生徒が泣き叫んだ場面が、昨日のように思い出されます。一人一人の更なる回復を切に祈ります。

・宮古教会でのカフェは、札幌カリタスから引き継いで、「カリタスみやこ」主催で行っている。（「カリタスみやこ」＝宮古教会という位置づけ）大震災から10年、活動できる人も減り、細々と継続しているが、カフェの回数を増やすことや、活動の幅を広げることができたら…と思っている。10年という月日は長いようで短い。これからどのような形でともに歩むことができるだろうか。

・10年を振り返り、地区制に移行し小教区のあり方が大きく変化したことを感じます。

同じ第4地区である沿岸の教会との関わりができたのも一つの変化でした。多少とも被災地の生の情報に触れる機会がもたれるようになりました。また、司祭が地区内で巡回して移動するため小教区によってはミサ時間が変化するようになりました。地方の教会であるため、人の移動や出入りは少なく高齢者の比率が高いため、この10年を振り返ると帰天された方も多く、教会のメンバーが目に見えて減ってきていることを強く実感しております。

そのような中で外国出身者（特にフィリピン）のコミュニティが確実に形成され増加していることは、大変好ましいことだと感じております。月に一度のフィリピン語のミサには大勢のフィリピン出身者が集います。これも震災後の大きな変化であると感じます。内陸である一関では教会も町も震災の傷跡はほぼ改善されたように思われます。教区や全国の方々の大きな支援がありここまで来られたことに感謝しております。小教区としては特に活動は行っておりませんが、今後も被災地、被災者のために祈っていききたいと思います。



◆宮城県

・東日本大震災の直後、教会として何かできることはないかという考えました。最初に教会から一番近い被災地の荒浜(深沼地区)の被災者が避難していた、仙台市の「東通仮設住宅」への支援が必要で、出番があるはずと考え出かけました。当然ながら全く支援活動などの経験はあるはずもなく、恐る恐る少人数の行動です。幸い仮設住宅の初代会長に快く受け入れていただき、以後約5年間、物資の支援から始まり段階的に活動範囲を広げながら、そして教会からのサポート及び信徒の協力、また、ほかの小教区(西仙台教会・畳屋丁教会)の協力を得てともに支援活動ができたことは、多少は被災者の方々に励まし寄り添えたことは、教会としてよかったと思っています。その際、成井大介神父(現新潟教区司教)にはご尽力をいただき感謝するとともに懐かしく思います。今は、仙塩8教会の「チーム・カリタス仙塩」が活動場所です。コロナ禍のため現在は休眠中です。

・2020年10月19日現在も行方不明者が2,528人おられることに衝撃を受けている。

・福島第一原発事故で甚大な被害があり、いまだに7市町村に帰還困難区域があり、原発の汚染水処理、汚染土の処理などの見通しが立たない状態でありながら、経済優先で原子力発電所の再稼働を進めていること、特に、大きな被害があった女川にもかかわらず、原発再稼働を承認したことに憤りを感じている。

・新聞やテレビの報道が少なくなっている。その中でサポートセンターニュースレターは身近な問題を取り上げて広報してくださっているので、ありがたいと思います。今後も期待しています。

・仮設住宅の集会所では被災者の方々と良いかわりをし、有意義なひと時を共に過ごしてまいりました。その方々が皆と一緒にくばらばらに復興住宅に移られました。その後、その方々のアフターケアがどうなっているのかと心配しています。



・以前から聴覚障がい者の方々に携わっていたので、あの地震が突然起きたときは、状況もわからずに、どんなに驚き、恐ろしかったことだろうと思い、後日、障がい者の方々を訪問しました。手話を第一言語にしている方（ろう者）が、以前は名取市閑上、岩沼市玉浦、岩沼市早股に在住でした。閑上や玉浦にお住まいの方の家は津波に流され、仮設住宅で生活されていました。亘理在住の健聴者の家族宅へ避難して同居している方もいました。床上浸水で同居の健聴者家族と二階に生活している方もいました。また、人生の途中で音を失った方（中途失聴・難聴者）が、名取市、岩沼市、亘理町に在住でした。

床上浸水で、家族と避難所で一晩過ごした方の話には、中途失聴・難聴者の方の現実を知らされました。中途失聴・難聴者の方は、人の言葉は聞こえないが、自分で話すことはできるのです。そのため、「本当は聞こえているのでは？」と誤解されやすいのです。避難所では、他人の声も自分の声も聞こえないので、音の調整ができずに大きな声で話すので、苦情があり、家族が「ここでは小さな声で話して！」と伝えても、それは難しく、早朝に家族一緒に自宅に戻って二階で寝たとのことでした。訪問したときは二階に住んでいました。健聴者もそのあたりを説明されないとわからないので理解できず、中途失聴者の方の理解されないもどかしさと寂しさをあのあたりにしました。

仮設住宅で日中、一人で生活しているろう者の方を、被災されなかったろう者の方々とともに訪問し、ランチとお茶でおしゃべりをしてきました。私たちの訪問をとても楽しみにしてくださり、その日は一日中、手話で思う存分おしゃべりができ、とてもうれしかったと笑顔で話されました。手話が飛び交う「手話カフェ」はしばらく続けました。しかし、楽しんでくださった方がお亡くなりになり、「手話カフェ」は閉店となりました。



・東日本大震災から10年が過ぎ、私たちは今コロナ対応に追われています。二つの災害は変化に対応する人や組織にとっても多くの共通点を感じさせます。今はコロナにおびえ未来を考えられない人々に変化が求められています。変化に対応できない人や組織は未来を失う可能性があると思います。変化の時には常識、価値観が激しく揺らぎます。急速なAI化、ソーシャルディスタンス。移動制限、感染対応に世界中が変化し続けています。何が変わり何が変わらないのか？ 誰にもわからない時代です。東日本大震災の時、安全神話が崩れた日、私たちは新しいボランティアを作り続々と立ち上げました。今、人の心に寄り添った本物のニーズ（需要）と応えるシーズ（供給）が問われています。単にカリタスが撤退するのではなく「本当に必要なものだけが残る」という正論に立ち返るときだと思えます。ピンチはチャンスと立ち上がったボランティアがコロナ禍でも人の心に寄り添ったものか？ そうでないか？ 感染リスクがあぶり出してくれました。今またチャンスでもあるのです。変化の時にも信仰・神の恵みは変わりません。変わるもの、変えられるものの見極めが今最も必要だと感じます。私は被災地にたって祈る言葉として皆様に贈ります。

「人生の旅路に

主よ 変わらないものを受け入れる心の静けさと 変わる勇気を
その両方を見分ける英知を私にお与えください

R ニーバーの祈りより」



◆福島県

・大震災のために長年住み慣れた故郷を離れ、全くなじみのないこの地に居を構えなければいけなかった方々にとって、その心痛は計り知れないと思います。私にできることはこの方々の心に寄り添い（お話し相手やお茶会などで）少しでも和んでいただければ幸いと思っています。

・あっという間の10年でした。

・自主避難者は人に知られたくないということから支援するのに気を配らなくてはならなかった。自主避難者の人々はさまざまな悩み（健康、避難場所への人々の不理解、家族内の意識の食い違い、子どもの精神状態）を今もこれからも背負って生きていくように思われる。支援を通して、日本人は、自分の決めたことに従って生きることを社会の多くの人が良しとしている生き方に押しつぶされてしまい、生きにくい社会であると痛感しました。原発廃止を求める声明が2010年に日本カトリック正義と平和協議会から出ていたこともこの活動の中で知りました。信者は社会的なことに関心が薄いです。



・2020/11/8 双葉町の白河の復興住宅に清水さんを訪ね、3人の方より話を聞きました。双葉にはもう帰れないとあきらめの気持ちもあり、何とか明るく暮らしたいと思っているが、コロナでバラバラにされた家族との交流もできず、つらい。何よりも今後の保障がどうなるかが不安、お金がどんどん減っていく。復興復興と騒ぎ立て、いりもしない色々な建物がやたらと作られているが、どうやってこれらをこれから先、大金かけて維持してゆけるのか全くおかしいと思う。被災者の気持ち、また、生活への手当はほっぽりなげで、全て利権でお金が動いている。

東電も知らん顔で顔を出さない。全国民が復興税で税金を取られ、国と東電の尻ぬぐいさせられている。国と特に東電は全国民に謝罪すべき。やる事成す事せこくずるい。やらないとは言わないがやるとも言わず、宙ぶらりんな状態に置かれている。被災者は全国にバラバラにされ、国、東電に立ち向かう力が分断されてしまって大きな力にならないのが、何よりも歯がゆく、悔しい。原発訴訟で勝訴したのはうれしい。勝ち続けてほしい。

汚染水はどうぞ東京で引き取って東京湾に流せ。原発被害者1人1人に国と東電は「詫び状」を入れよ！「ちゃんとおれらの話聞け」「お前らバカやってんだねー」

お話を伺って、改めて、ニョキニョキ建物は建っているが、被災者、故郷を失ってしまった方々は本当に日々忘れられ、気持ちは置いてきぼりにされたまま何も根本的には解決されていないのだと気付かされました。

・震災復興は10年を経過しても今なお受けた心の傷は深く、建物、インフラが可能になった今も癒されない状況の人々が多い。出来事を何かのメッセージと受け止め、前に向かって歩むためには忍耐強い寄り添いが必要であると感じています。そのためにかかわりと絆が大切な要素となります。屋外活動の支援も大切ですが腰を据えてゆっくり時間をかけて関わっていくことが求められているように感じています。

・原発事故による被災からの復興は、10年たってもそして施設等が整備されたとしても人の心の復興にはまだまだ時間と真心による寄り添いがさらに必要と感じる。家族や地域の人々、世代間の分断は深刻とほんの1年余りのかかわりの中で感じています。

・原発事故後のことで、いつも目覚めているように、また、できる限りこの地で長く生きていきたいと思っていますが…



・原発事故当時、今できることは何か？ 神様教えてください！もし、私たち福島市民に避難指示が出ていたとしたら？私たちは、今どうしているだろうか？

原発事故発生した浜通りから60km離れた福島市に避難されていた方々のことを思いながらも、自分たちも放射能飛散のある被災者であるが、震災による後片付けに追われながらの祈りの毎日であった。

「がんばろう福島！」「がんばろう東北！」「がんばろう日本！」の旗が市内の沿道になびいていた。

松木町教会では、2009年「愛の支援グループ」が設立されていた。教会委員会の了解を得て、まずは、教会が避難所となった時のためにも毛布の寄付を信徒に募ることから始めた。

それからTVやインターネットの情報から、相馬市へ流出物写真洗浄に出かけ、そこで知った情報から（灯台下暗し）福島市にある県のあづま総合体育避難所へ支援物資を届けたり、炊き出しの手伝いに。さらに、その状況から心のケアの必要性を感じ、温かい抹茶と野の花を飾り「もてなしの傾聴」を始めた。ひんやりとした空気から避難者がほっこりとなり一言、二言と話し始められた。そして、それが仮設へと繋っていった。

ボランティアは、初めての経験の私たち松木町教会信徒。

いつしか、仮設では「カリタスさん」と呼んでもらえるようになっていた。

気が付いてみると全国の教会は一つになっていた。全国からのボランティアさんと、祈りとご支援から私たちは励ましと勇気を貰った。今、思えば、避難者、ボランティア、教会関係者（多くの司教、司祭、シスター）の皆様との出会いは松木町教会として舟を漕ぎ出せたことの大きな恵みであり、10年間の宝。

この恵みが、これからも信仰共同体として、未来の平和へと続いていくことを願い祈っている。時には、困ったこと、つまずきかけ

たこともあったが、聖霊の力を頂きながら笑顔になれた。人の思い、考えはさまざまであることも痛い程体験したが私たちができていることは、イエス様の導きであり、マリア様が守ってくださるからと、この10年間、イエス様がこんなに近くにいてくださっていることを実感できたことも大きな恵み。

この10年を振り返って、信仰者として深く思うことは、私たちはぶどうの木のように。そして「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について感謝しなさい。」このみ言葉を味わえたような気がした。感謝！！



・原発事故の影響は、一見少なくなったように思われますが、よく見ると様々な困難が残っており、まだまだ課題は多いと思います。今後も、支援活動は細々ですが、継続していきたいと考えます。

・東日本大震災の支援におけるテーマは「絆」でした。私はそれが見事に実践された10年だったと実感しています。家を失い、家族を失い、あるいは離れ離れになり、故郷を追われて避難する方々を他の市町村が受け入れ、仮設を住まいとすることになった被災者は突然の変化に戸惑い、途方に暮れる状態にありましたが、そういう人々を支援するために、日本のみならず、世界中の人々が応援をしてくださいました。必要物資が次から次へと届き、被災者を励ますためにイベントが開催されていきました。人間関係が疎遠になりつつある世の中であって、誰もが自分にできることで、神様のみ旨を果たしていった、10年間だったと思います。

仙台教区サポートセンターからのお知らせ

皆様に残念なお知らせを申しあげなければなりません。

じつは、仙台教区サポートセンターは、来年3月末日で閉鎖することに決まりました。そのため、このニュースレターも、この号の次は、3月に145号を発行して、終わりということになります。これまで、いろいろな不手際もあり、皆様に、ご迷惑などをお掛けしたこともございましたが、なにとぞおゆるしくださいます。

仙台教区直轄であるカリタス石巻ベースについても、現在の形での運営は3月で終了となりますが、地域の方々の集いの場として引き続きご利用いただけるように、調整をしています。

地震・津波・福島原発被害の被災者の方々のこれまでの苦しみや悲しみをともに歩んできた私たちです。復興が終わったわけではないこともよく知っています。皆様の「心によりそって」いきたいと願いつつも、このような結果になったことは、本当に残念ですが、来春、活動を終了した後も、個人的にできる範囲で何かをしていきたいと思っています。

この10年でのたくさんの出会い、いただいた恵みに感謝し、来年3月まで誠意を尽くして歩んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

仙台教区サポートセンタースタッフ一同